



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会的受容性の高い野生動物保全の課題：インドネシア共和国カリマンタン島焼畑農耕民による商業的野生動物猟の民族誌的研究〔全文の要約〕
Author(s)	澤井, 啓
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16496号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95073
Type	doctoral thesis
File Information	Kei_Sawai_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 澤 井 啓

学位論文題名

社会的受容性の高い野生動物保全の課題：インドネシア共和国カリマンタン島焼畑農耕民による商業的野生動物猟の民族誌的研究

本論文は、インドネシア・カリマンタン島の農村部コミュニティにおける商業目的の野生動物猟を通じて、地域社会に受け入れられ、かつ長期的に履行できる「社会的受容性の高い野生動物保全策」の課題を追究したものである。インドネシアのカリマンタン島は豊富な生物多様性を有する一方で、近年マレーセンザンコウをはじめとする希少野生動物の個体数が顕著に減少し、深刻な危機に直面している。しかし、従来の要塞型保全やコミュニティベース保全では、外部からの一方的な規制がその実施にはさまざまな複雑な困難が伴い、目的を達成できなかった例も数多く、環境保護と貧困削減の点で、効果がないだけでなく、時にはマイナスの結果を示し、それらによって生み出される抵抗が有益でない可能性があるという問題がたびたび指摘されてきた。そのため、地域社会が野生動物に対して単に食料や換金のための価値だけではなく、野生動物の多様な価値を認識しながら、トップダウンな政策を含む野生動物保全策を受け入れ、その試行と実践が現実、長期的な視点から見ても実現可能であるかどうかという点が今後の野生動物保全においては重要になる。すなわち地域社会にとって受容可能である野生動物保全策、「社会的受容性の高い保全策(Socially Acceptable Conservation)」が求められるようになったといえる。そのためには地元における狩猟の意味と重要性を包括的に理解する必要がある。特に本研究では、地域社会の文化的背景や経済的状況、狩猟者の動機や価値観を深く理解するために、新たに 5 つの点に着目した。「商業目的の狩猟が伝統的な狩猟か、ブームに応じた猟であるか」、「猟を通じて狩猟者が実現しようとしている価値が単一であるか、多様であるか」、「狩猟機会の開放性、閉鎖性」、「保全をすることにより地域社会に利益をもたらす可能性」、「地域社会が保全を営んできたか、今後営む予定があるか」に着目しカリマンタン島地域社会における商業目的の野生動物猟の実態を詳細に分析する必要性を示した。

そこで、本研究は(1)インドネシアのカリマンタン島における商業目的の狩猟に着目し、地域住民が希少種を含む多様な野生動物の狩猟を行ってきた意味と重要性を明らかにし、(2)商業目的の狩猟に対する理解を基に、野生動物に対するカリマンタン島地域社会にとって社会的受容性の高い、将来の保全策について議論することを目的とした。

現地調査の方法としては、カリマンタン島北カリマンタン州に位置し Heart of Borneo 地域内にあるアポ・カヤン(Apo Kayan)地域、その中でも焼畑先住民であるケニャ族が暮らす「A 村」を中心に、2018 年から 2024 年にかけてフィールドワークを行った。狩猟者や仲買人等への聞き取り調査、猟の参与観察等を駆使し、「商業目的の狩猟」の実態を深く掘り下げた。また、日常生活の中での野生動物利用、慣習法、地元社会の規範を把握するため、対話型熟議(DIDLIS)などの手法を参考に、地域住民との信頼関係を構築しつつ調査を進めた。

第 2 章では、カリマンタン島中央部の内陸に位置し、先住民族であるケニャ族が集落を形成している A 村を取り上げ、その歴史的経緯や社会・文化的特徴、慣習法が果たす役割などを論じた。A 村はカリマンタン島中央部の内陸にあり、森林に囲まれた焼畑農耕や採集、狩猟を主な生業とする先住民コミュニティである。物流面で都市部から大きく隔絶されており、外部からの公的サービスや市場アクセスも限定的である。村には従来から慣習法が存在し、土地や森林資源に関する紛争の調停や利用ルールの設定において大きな影響力を有しており、この慣習法が住民の行動を統制する仕組みとして根付いている点が明らかになった。

第3章ではA村が主に焼畑農業を基盤とした第一次産業によって生計を維持している実態を明らかにした。さらには従来から行われている木材・沈香の採取から換金作物まで、経済活動が多様化している実態を示した。周辺には手つかずの原生林がまだ残され、複数の希少野生動物が確認されている。近年、木材伐採や香木（沈香）の採取に加え、コーヒー・バニラなど換金作物の栽培が拡大し、生業の多角化が進んでいる。一方で、多種多様な商業目的の野生動物猟もA村の自然資源利用において重要な役割を果たしている。

第4章から第7章は特に商業目的に狩猟される野生動物について着目し、その猟の歴史・技術・動機だけでなく、その猟の意味と重要性について議論した。第4章では、A村におけるキガシラヒヨドリ猟の歴史とその絶滅に至る過程を詳細に分析した。キガシラヒヨドリはその美声や羽色、都市部でのペット需要により一時的に高値がついたことからキガシラヒヨドリへの狩猟が横行。村周辺では壊滅的な減少を招き、ほぼ絶滅に近い状態に陥った。その結果、現在の地域住民も「絶滅させてしまった」という強い後悔を表明していた。ただし、この猟は現金ではなく、生活必需品でありアポ・カヤン地域では入手が困難であった塩との交換が主な動機であったため、キガシラヒヨドリを捕まえて売却して得られる経済的利益よりも文化的背景が強く影響した。猟の結果、地域住民の間には絶滅に対する多様な認識が生まれ、一部は後悔と保全意識の向上を示す一方で、他の者は当時の必要性から後悔していないとの意見も存在する。この多様な意識は、今後の野生動物保全策を策定する際に、地域住民の異なる視点や猟の文化的背景を考慮する必要性を示唆している。

第5章では、A村におけるヤマアラシ猟の多面的な役割と地域社会への影響を詳細に分析した。カリマンタン島に生息するヤマアラシ、すなわちマレーヤマアラシ、ボルネオヤマアラシ、ネズミヤマアラシの三種を対象とした猟は、伝統的な手法であるくくり罟や箱罟といった技術を用いて行われ、文化的小および経済的に重要な位置を占めていた。特に、ヤマアラシから稀に得ることができる胃石は海外で高い薬効と海外での市場価値を持つが、ヤマアラシを捕獲しても胃石の含有率が極めて低いため、ヤマアラシ猟自体は安定した収入源とはなりにくい。一方で、ヤマアラシはキャッサバやその他の農作物に深刻な被害を与える害獣としても認識されている。そのため、ヤマアラシは換金目的以外にも農園における獣害対策の一環として猟が行われている。また、一般的にヤマアラシは不安定かつ美味しくないと認識されているが、食料としてヤマアラシ猟を価値づける人もいる。さらに、ヤマアラシを狙っての原生林での長期滞在する猟に楽しみを見出している人もいた。このように、ヤマアラシ猟は胃石の経済的価値、農作物保護、食料資源としての利用価値、楽しみという多様な猟の意味の側面を持ち、地域社会における猟の複雑性を示している。

第6章では、A村におけるマレーセンザンコウ猟の歴史的経緯と経済的影響、及び文化的側面について詳細に分析した。特に2010年以降に海外で漢方薬として需要が発生し、マレーセンザンコウの鱗の取引が仲買人との間で活発化することで、村民の約3割がこの猟活動に従事するブームが発生した。主な猟法としては罟罟等が採用されたが、地域住民による捕獲頭数は捕獲自体が困難なために非常に低く、経済的な収益は不安定であった。COVID-19パンデミックの影響により2020年以降、国際的な取引が停滞し、マレーセンザンコウの鱗の市場価格は急激に下落、狩猟ブームは急速に終息した。文化的側面においては、マレーセンザンコウ猟は主に経済的利益を目的として行われており、伝統的な医療用途や文化的象徴としての利用はほとんどなかった。猟活動自体は一部の村民にとって、特に森林でのマレーセンザンコウ猟は趣味的な側面も持ち合わせていたが、ケニヤ族の文化活動としては文化的意義をほとんど持つものではなかった。また、地域住民の生業がマレーセンザンコウに影響している可能性が僅かであるが示唆された。

第7章では、A村におけるオナガサイチョウ猟について、起源と歴史、猟技術、経済的影響および文化的意義について分析した。羽を装飾に用いる伝統舞踊や儀式において、オナガサイチョウがシンボルとしての役割を果たしてきた一方で、市場でカスクが高額に取引されるブームが生じたこと捕獲圧が高まり、個体数が減少した。2010年代から商業目的でのオナガサイチョウのカスク取引が始まり、ブームが発生した。主な猟法としては遠方での宿泊を伴う猟銃での猟が用いられ、高額なカスクの取引により一度の猟で高額な収入が見込まれた。しかし、オナガサイチョウは次第に個体数を減らしたことによる捕獲率の低さや、仲買人が語ったCOVID-19パンデミックによる国際取引の停滞によりオナガサイチョウ猟ブームは急速に終息した。文化的側面では、オナガサイチョウの羽やカスクはケニヤ族の伝統衣装や儀式において象徴的な役割を果たしており、地域文化として非常に重要な野生動物であり、地域住民は地域社旗におけるオナガサイチョウの重要性を意識していた。

第8章では、こうした多様な野生動物猟がA村とその周辺地域にもたらす影響を検討し、住民がどの

ような保全意識を持っているかを分析した。A村の狩猟者たちは、多くが野生動物の減少に対する危機感を抱いている。特に商業目的の野生動物猟で捕獲される野生動物であるキガシラヒヨドリ、ヤマアラシ、マレーセンザンコウ、オナガサイチョウの減少（キガシラヒヨドリはほぼ絶滅）が顕著である。その中でも地域を象徴する野生動物であるオナガサイチョウの減少が著しく、地域社会は持続可能な保全策の必要性を認識している。筆者は地域住民に対して11の保護や保全のアイデア（保全をしないという考え方を含む）を提示し、狩猟者の意向を尋ねた。その結果地域社会が主体となって進める伝統的な保全策であるTana' Ulenの設立に対する強い支持が見られた。Tana' Ulenは森林資源と野生動物の協働的な保護およびエコツーリズムを通じた代替収入源の創出を目的としている。Tana' Ulenは2023年にA村が独自に決定したゾーニングによる野生動物・森林資源管理である。そこには行政や周辺村、NGO等の様々な対象とのコラボレーションによって創出をしようとしている。野生動物や森林資源を守るために様々な保護・保全策や、あるいは保護・保全を行わない等の様々な策が考えられるが、A村の村長と村民が2023年現在に選択した案が、「Tana' Ulenによる森林資源・野生動物保全」であった。この取り組みは地域社会や行政等との協治による先住民およびコミュニティによる保全地域（Indigenous and Community Conservation Areas: ICCAs）創出の事例であり、最新のインドネシアの政策の成果、そして先住民が主体となりICCAsを創出するまでの背景・過程、今後のICCAsの課題を実践し示すことができる事例となりうる。野生動物保全策の地域の受容性の傾向としては、保護保全を行わないことには多くは反対している。だが、ヤマアラシは数が多いことと獣害から、保護や保全を行うことへの反対意見があった。希少な野生動物・鳥の飼育や猟期の設定、年間捕獲数の制限といったものに抵抗感や実現可能性が低いことを述べている。また、狩猟の許可制や外部狩猟者の規制に関しては賛成意見が多数を占めるものの、監視体制の現実性や地域間の調和を懸念する声もあり、法的枠組みの整備や地域間協力の強化が求められている。NGO等外部との協働については経験不足もあり賛否が分かれた。狩猟者たちは代替収入源の創出、インドネシア国内法や慣習法による保護策を支持しつつも、実効性のある柔軟なアプローチが必要であるとの認識を共有している。また、狩猟者たちは野生動物保全という複雑な問題に対し、筆者の質問に悩みながら、時に矛盾しつつも回答していたことも重要な発見である。

第9章では、これまでの知見を総合し、焼畑農耕民が行う商業目的猟に対して社会的受容性の高い保全を成立させるために解決すべき課題を整理し、総合的な考察を行った。はじめに、第4章から第7章までのキガシラヒヨドリ、ヤマアラシ、マレーセンザンコウ、オナガサイチョウを中心とした商業目的の狩猟の実情を踏まえた保全策における課題についての考察を行った。「地域住民が希少種を含む多様な野生動物の狩猟を行ってきた意味と重要性」という第一の研究目的への回答として、A村における商業目的の野生動物狩猟の意味と重要性、対象種および地域社会に与える影響を、「商業目的の狩猟が伝統的な狩猟か、ブームに応じた猟であるか」、「猟を通じて狩猟者が実現しようとしている価値が単一であるか、多様であるか」、「狩猟機会の開放性、閉鎖性」、「保全をすることにより地域社会に利益をもたらす可能性」、「地域社会が保全を営んできたか、今後営む予定があるか」という5つの視点に基づいて整理した。狩猟の歴史的背景やその目的は狩猟を対象とする種によって大きく異なり、換金以外にも文化的・社会的価値を有する。このため、地域社会の価値観やニーズに基づいた保全策が必要である。狩猟は換金目的であり、換金価値の低減は、商業目的の狩猟を抑制する有効な手段となる一方で、キガシラヒヨドリ猟の要因となった塩に対する需要やヤマアラシの獣害等が持つ特定の需要や意義を考慮し、狩猟の開放性の特性から地域内の多くの狩猟者の多様な価値観を尊重する必要がある。また、保全には利益と不利益が伴い、特にヤマアラシに対する保全によって、ヤマアラシがキャッサバ等に対して獣害問題を引き起こす可能性から猟が行われてきており、保全が必要でなかった背景がある。一方で、Tana' Ulenをベースとしたエコツーリズムや文化遺産の保護は、地域住民の保全活動への関与を促進し、今後地域社会全体が主体的に関与し、社会的受容性の高い保全策を構築する可能性がある。一方でインドネシア国内法による保護策はA村では十分に機能しておらず、また地域社会の生活の実情が既存の保護法に合っていない。

さらに、本研究の研究目的の一つである「商業目的の狩猟に対する理解を基に、野生動物に対するカリマンタン島地域社会にとって社会的受容性の高い、将来の保全策について議論する」ためにこれまでの結果を分析した。そこで、分析の手法として日常活動理論を使い、地域社会にとって効果的な保護や保全の枠組みを検討した。その結果、換金作物をはじめとする代替収入源の創出と、慣習法（例えばTana' Ulenによる野生動物保全策）による保護や保全の2点の実現可能性と社会的受容性が高いことが示唆された。だが、慣習法の保全におけるTana' Ulenの導入といった地域社会が主体的に提案する保全策は、高い社会的受容性を持つ一方で、具体的な実施においては合意形成や監視体制の整備等の課題が存在す

ることも指摘した。Tana' Ulen に関しても、慣習法の運用や監視体制の整備、外部機関との連携が不可欠である。そのため、Tana' Ulen のような先駆的な取り組みを基盤として、地域全体で持続可能な野生動物保全を構築することが求められる。また、地域住民の多様な意見や価値観を尊重しつつ、順応的ガバナンスや順応的管理のアプローチを採用し、継続的な対話とフィードバックを通じて保全策を柔軟に改善していく必要がある。そのため、カリマンタン島地域社会にとって社会的受容性の高い保全策への示唆として、Tana' Ulen、代替収入源の創出（換金作物や水田、観光業、エコツーリズム導入等）、慣習法による保護動物の設定、外部との連携や周辺村や県等との連携（協働、フィードバック）、そしてそのベースとなるインドネシア国内法の組み合わせが重要であることを示した。野生動物の保護と Tana' Ulen、それらを強化するインドネシア国内法による保全の枠組みにより、商業目的の野生動物猟を地域社会において効果的に規制することで、代替収入源の提供だけではカバーできない商業目的の狩猟を制限して、地域内の野生動物は持続可能なものになるだろう。さらに、周辺村や県等との連携を強化することで、広域的な野生動物保全の実現が期待される。代替収入源の創出により、商業目的の猟からの依存を減らし、持続可能な経済活動を支援することも重要である。これらをさらに外部の NGO や研究者等が地域社会と連携し、また取り組みを評価することで保全策をより良いものへと発展させることができる。これにより、A 村での効果的な保全が可能となり、地域社会の文化や生活を損なうことなく自然資源の保護が実現されることが期待される。最終的には、A 村の Tana' Ulen を中心とした地域主体の管理体制の取り組みをモデルケースとし、他の村々にも波及させることで、アポ・カヤン地域全体での協働による持続可能な野生動物保全が達成されることが求められる。

これまで得られたこれらの結果は、研究目的である「地域住民が希少種を含む多様な野生動物の狩猟を行ってきた意味と重要性の解明」と「商業目的の狩猟に対する理解を基に、野生動物に対するカリマンタン島地域社会にとって社会的受容性の高い、将来の保全策についての議論」に対する具体的な回答を提供するものである。この研究がもたらした有益で新しい知見は以下のとおりである。第一に、本研究は、地域住民の生活基盤や文化的背景に根ざした多様な価値観を重視し、野生動物猟が地域住民にとって果たす役割、意味と重要性を包括的に解明した。第二に、商業的な猟の対象になっている希少野生動物の保全に対する意識や保全策に対する意識・選好を聞き取り調査により明らかにし、具体的に地域社会にとってどのような保全策が望ましいのかを聞き取り調査によって明らかにした。これにより、様々な保全策の複合、そして多様なアクターとの協働が必要であることを明らかにした。第三に、保全政策における順応的管理や順応的ガバナンス、そして多様なアクターとの協働を行うトランスディシプリナリー研究（TD 研究）及びその調査手法であり、地域社会が有する隠れた思いや考えを掘り起こし、ステークホルダーとの真摯な対話と熟議を重ねる「生活圏における対話型熟議（DIDLIS）」の重要性を強調した。地域住民の声を取り入れたアプローチが、実効性の高い保全策の構築につながることを示し、理論的および実践的貢献を両立させようとした。本研究で示した事例と議論は、森林減少と野生動物の危機が深刻化する現在、環境保全と人間の生活がいかに両立できるかを考えるうえで具体的かつ重要な示唆を与えるものであり、今後も対話を重ねながら保全策を具体化し、他地域へと波及させ、さらなる研究と実践の基盤となることが期待される。